

《論文》

高齢者疑似体験演習の学習効果

上田 雪子

高齢者疑似体験演習の学習効果

上田 雪子

和文抄録：本研究の目的は、高齢者疑似体験演習の学習効果を明らかにすることである。分析した結果、次のことが明らかになった。身体的側面の理解は【視力の低下】【視野の狭窄】【色覚の低下】【聴覚の低下】【触覚の低下】【関節可動域の低下】【筋力・平衡感覚の低下】【緩慢な動作の増加】、心理的側面の理解は【心理的な負担感の増大】、社会的側面の理解は【社会的活動の減少】が抽出された。高齢者疑似体験は、高齢者の身体的、心理的、社会的理解に影響を与えている。高齢者理解のためには、高齢者とのコミュニケーション手段としての援助技術や非言語的コミュニケーションの実施方法および高齢者を正しく理解する知識や情報を得られるようなアセスメント能力を育成する必要がある。

キーワード：高齢者理解、高齢者疑似体験演習、学習効果、看護大学生

I. はじめに

わが国は、諸外国に比類のない速さで超高齢社会を迎えつつあり、今後ますます65歳以上の人口の構成割合が増加することが推計させている¹⁾。その一方では核家族化が進み、高齢者と接する機会の少ない若者が増えている。このような状況のなか医療系及び福祉系の大学生は、卒業後に高齢者ケアに携わる可能性が極めて高い。また、高齢者の理解をしないままに病院や施設で実習しても教育効果が期待できないという問題に直面する。さらに介護保険導入などを背景に医療系及び福祉系の大学生が高齢者に対する理解を深めることは重要な課題といえる。そこでこれまで高齢者に対する理解の一助として、高齢者疑似体験を活用することがあげられている²⁾。

看護教育において、以前から高齢者の理解を深めるための様々な体験学習が取り込まれ、その効果に関する多くの研究が行われ、これまでも高齢者疑似体験が高齢者理解に繋がると報告されている^{3)~5)}。高齢者との年齢差が大きく、また核家族化により身近に高齢者と接する機会が少なくなった学生が、加齢現象を来たしている高齢者の心身の特徴をふまえて、看護専門職として、老年看護の基礎的な知識を身につけて発展させていくということには困難があり、教育方法の工夫が必要である。そこで老年看護学領域では、高齢者疑似体験演習を取り入れている。これまでも学生が「高齢者役」と「介助者役」の両方を体験することで、日常生活動作のうえでの不自由さや高齢者になることの不安を感じ、そのうえで介助者の重要性が認識できたと報告されている⁶⁾。また疑似体験演習を行なうことで、高齢者への理解が、漠然としていたものから具体的な援助を考え実施するという態度へ変化をもたらしたと報告されている⁷⁾。そして、疑似体験演習を取り入れることで、学生が身体的側面や精神的・情緒的な側面での理解を深めており、老年看護の授業展開において効果があったと報

告されている⁸⁾。また、疑似体験演習を行なったのちに老年看護学実習の場で実際に高齢者に接することで、高齢者の機能低下による日常生活での影響の大きさや心理的側面についての理解が深まり、それが援助につながっており、さらに老年看護学実習に役立つような学内での講義、演習の進め方を検討すべきであると報告されている⁹⁾。これまで我々は、高齢者理解を深めるために高齢者疑似体験演習を取り入れているが、その学習効果については明らかにしていない。

そこで本研究では、高齢者疑似体験における加齢による変化と介助のあり方についての学生の学びを明らかにし、高齢者ケアを円滑に進めるための高齢者疑似体験の効果について考察する。

II. 研究目的

高齢者疑似体験における加齢による変化と援助のあり方についての学生の学びを明らかにし、高齢者ケアを円滑に進めるための高齢者疑似体験の効果について考察する。

III. 研究方法

用語の定義

高齢者疑似体験：高齢者体験セットLM-060（KOKEN）を装着し、円背や上肢及び下肢の関節可動域の制限、特に視力や聴覚といった感覚機能の低下など、75歳から80歳ぐらいになった状態を体験することである。

1. 対象者

A大学3年生82名のうち高齢者疑似体験に参加し、協力の同意が得られた学生80名である。

2. 調査時期

X年の老年看護学の講義・演習の時間に調査した。

3. 調査方法

- 1) 高齢者疑似体験後の記録を精読し、高齢者疑似体験で感じた加齢による変化に関する学びに対する記述を抽出し、カテゴリー化して、学生の学びを明らかにする。
- 2) 介助者体験後の記録を精読し、介助のあり方に関する学びに対する記述を抽出し、カテゴリー化して、学生の学びを明らかにする。
- 3) 1)と2)をとおして、高齢者理解のための高齢者疑似体験演習の効果について考察する。

4. 高齢者疑似体験演習の概要

高齢者疑似体験演習の内容（表1）およびローテーション表（表2）に示す。

表1. 高齢者疑似体験演習の内容

1. 目的

疑似体験をとおして、高齢者の身体可動性・感覚機能を理解し、高齢者が日常生活で体験していることを高齢者ケアの視点で考える。

2. 手順

1) 4つ(A・B・C・D)のグループに分かれる。ローテーション表を確認する。

2) 2人1組となり、以下の2つの課題を、ローテーションで体験する。

【課題1：疑似体験①】は疑似体験セットを装着しての行動体験

【課題2：疑似体験②】はグローブ、耳栓、ゴーグルを装着しての行動体験

課題1と課題2は、交互に体験者と介助役となり、着脱を含めて1人15分(1人合計30分)で実施する。

3) ローテーションに定められた時間内に、装具装着・体験・装具の脱着・考察を行う。

4) グループ全員の演習が終了したら、元通りに物品を戻し、周囲の環境を整え、次の課題場所に移動する。

3. 方法

【課題1：疑似体験①】(1人15分)

(1) 椅子からの立ち上がり動作を行う。

(2) 実習室内を歩行する。

(3) 畳の部屋まで移動し、座位になる。

(4) 座位から立ち上がる(必要時、福祉用具「たちあつぷ」を用いる)。

(5) トイレで排泄の一連の動作を真似してみる。

(6) 実習室内の浴室・浴槽に入る。

【課題2：疑似体験②】(1人15分)

(1) カタログを見て、注文表にオーダーを書く(介助者が体験者に指定の商品を伝えた後)。

(2) カードホルダーの穴に紐をとおし、紐を結ぶ。また紐を解く。

(3) カタログや新聞、指示書の字体・大きさを見る。

(4) 折り紙の色をあてる。折鶴を折る。

(5) 実習室内またはエレベーターホールまで移動し、物品に触れる。

(6) 景色を見る。

4. レポート課題

1) 【課題1：疑似体験①】と【課題2：疑似体験②】をとおして、高齢者の身体可動性・感覚機能が高齢者の生活にどのような影響を及ぼしているかを想像し、記述する。

5. 演習前の注意事項

1) 動きやすい服装で来てください(服の上から疑似体験セットを装着しますので、薄手のジャージ素材のものがよいでしょう。ジーンズは避けてください。また、マジックテープが当たって傷む素材のものは着用しないでください)。

2) 長髪は束ねてください。

3) ナースシューズを持参してください。

4) メモ用紙を持参してください。

5) 名札を着用してください。

6) 演習前に貴重品(財布、携帯電話等)はロッカーに入れてください。

7) 授業開始時は実習室に集合してください。

6. 演習中の注意事項

1) 介助者は、事故のないように慎重に介助する。大声を立てず、静かに行動する。

2) 疑似体験セットは丁寧に扱う。使用前にセット内容を確認し、使用后、元の状態に戻す。万が一、破損した場合は速やかに申し出る。

3) 名札を見えやすい位置につける。メモ用紙を携帯する。

表2. ローテーション表

グループ	8:40-8:55	8:55-9:35	9:35-10:15	10:15-10:25		10:25-11:25		11:25-11:35	11:35-11:40	11:40-11:50
A	説明	疑似体験①	疑似体験②	休憩・講義室に移動	環境調査・コース決め	レポート作成	実習室に移動	まとめ	後片付け	
B		疑似体験②	疑似体験①							
グループ	8:40-8:55	8:55-9:05		9:05-10:05		10:05-10:15	10:15-10:55	10:55-11:35	11:35-11:40	11:40-11:50
C	説明	講義室に移動	環境調査・コース決め	レポート作成	休憩・実習室に移動	疑似体験①	疑似体験②	まとめ	後片付け	
D						疑似体験②	疑似体験①			

1) 目的

疑似体験をとおして、高齢者の身体可動性・感覚機能を理解し、高齢者が日常生活で体験していることを高齢者ケアの視点で考える。

2) 高齢者疑似体験演習の方法

(1) 高齢者役1名、介助者役1名の2人一組とした。

(2) 高齢者役：高齢者体験セットLM-060 (KOKEN) (杖、ゼッケン、手首の重り、足の重り、耳栓、ゴーグル、指拘束具、手袋、肘拘束具、膝拘束具) を装着し体験項目を行った。疑似体験①は高齢者疑似体験セットを装着しての行動体験、疑似体験②はグローブ、耳栓、ゴーグルを装着しての行動体験である。器具とその意味を表3に示す。

表3. 器具とその意味

器具名	意味
A. 足の重り	筋力の低下と平衡感覚の衰え
B. 指拘束具、肘拘束具、膝拘束具	関節の曲がりにくさ (関節炎など)
C. 耳栓	聴力機能の低下
D. 手首の重り	筋力の低下
E. 手袋	皮膚感覚の機能低下 (触覚、痛覚、温度感覚の低下)
F. ゴーグル	視力の機能低下、白内障、視野狭窄
G. 杖	歩行の便利さと、倒れた時の不自由さの体験
H. ゼッケン	参加者の安全を確保

(3) 介助者役：高齢者役の安全面に配慮して介助を行った。

3) 体験時間：一組30分として、15分で高齢者役と介助者役を交代した。

- 4) 体験項目：擬似体験①（椅子からの立ち上がり動作を行う、実習室内を歩行する、畳の部屋まで移動し座位になる、座位から立ち上がる（必要時、福祉用具「たちあっぷ」を用いる）、トイレで排泄の一連の動作を真似してみる、実習室内の浴室・浴槽に入る）。擬似体験②（カタログを見て注文表にオーダーを書く（介助者が体験者に指定の商品を伝えた後）、カードホルダーの穴に紐をとおし紐を結ぶ、また紐を解く、カタログや新聞、指示書の字体・大きさを見る、折り紙の色をあてる、折鶴を折る、実習室内またはエレベーターホールまで移動し、物品に触れる、景色を見る）。
- 5) レポート内容：【課題1：擬似体験①】と【課題2：擬似体験②】をとおして、高齢者の身体可動性・感覚機能が高齢者の生活にどのような影響を及ぼしているかを想像し、記述する。

5. 分析方法

レポートの内容に繰り返し目をおし、文脈に留意しながら意味の読み取れる単位で抽出した。次に、類似性・相違性を検討しながら、カテゴリ化した。分析の過程で、質的研究の経験者と研究者で意見の一致をみるまで内容の妥当性を検討した。

IV. 倫理的配慮

高齢者疑似体験を終えた学生に対して、記録を研究に使用することを口頭で伝え、研究協力の有無により不利益をこうむらないこと、分析には個人が特定されないようにプライバシーに配慮すること、研究以外には使用しないことを文書で説明したうえで書面にて同意を得た。本研究はA大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

V. 結果

1. 対象者の概要

対象者は3年生80名（97.6%）であった。

2. 高齢者疑似体験における学生の学び

高齢者疑似体験後のレポートから意味内容を分析した結果、931記述抽出された。高齢者役体験に関する学びは529記述抽出され、加齢による身体的側面の理解に関する学びは17サブカテゴリから8つのカテゴリが導き出された。一方、加齢による心理的側面の理解に関する学びは8サブカテゴリから1つのカテゴリが導き出された。介助者役体験に関する学びは140記述抽出され、13サブカテゴリから4つのカテゴリが導き出された（表4-1、表4-2）。以下、【 】はカテゴリ、[]はサブカテゴリ、『 』は記述データの部分引用を示す。

表4-1. 高齢者役体験の学生の学び

身体的側面の理解		
カテゴリー	サブカテゴリー	記述データの部分引用
【視力の低下】	[見えづらい] (43)	『霞んで見えづらかった』 『文字の大きさや濃さによつて見づらかった』 『カタログや新聞の文字が見えず、読みづらかった』 『外の景色がよく見えなかった』 『注文表にオーダーを書くのに、3と8の区別がしにくかった』
		『物が見えづらいので、何かわかるまでに時間がかかった』 『周りの環境を把握しづらいので、理解するのに時間がかかった』 『注文表にオーダーを書くのに時間がかかった』 『歩行時全体が見えず、安全な環境なのかわからなかった』
【視野の狭窄】	[状況判断に時間がかかる] (32)	『物に触れる時、距離感がつかめなかった』 『トイレや浴槽に入る時距離感がわかりづらかった』 『カードホルダーの穴に紐をとおしづらかった』
	[距離感がつかめない] (24)	『黒色と紫色が同じに見えた』 『黄色と橙色が同じに見えた』
【色覚の低下】	[色の識別がしづらい] (46)	『遠く話し声が聞こえなかった』 『耳のそばで話しても話の内容を聞き取りにくかった』 『高い声よりも低めの声の方が聞こえやすかった』
【聴覚の低下】	[音が聞こえづらい] (43)	『触っただけでは何を触っているのかわからない』 『手先が自分の感覚ではないような感じがした』
【触覚の低下】	[触った物がわかりづらい] (28)	『紐を解くことができなかった』 『折鶴を折るのに時間がかかった』
【関節可動域の低下】	[巧緻性の低下] (38)	『肘や腰が動かしづらい] (40)』 『膝と腰が曲げにくかった』
	[歩きづらい] (40)	『走れなくなる』 『歩行の速さが遅くなる』
	[座る・立つがしづらい] (40)	『杖のような支えになるものがないと立ち上がりづらかった』 『立ちづらいので、座りっぱなしが多くなる』 『トイレなどは手すりがないと大変だと感じた』 『正座ができないので椅子が必要である』
	[筋力・平衡感覚の低下]	『筋力が低下しているため、ふんばれない』 『前かがみになるので、歩くときふらついた』
【緩慢な動作の増加】	[歩き方が不安定] (40)	『足が拳がらさず、畳の上や段差につまずきそうになった』
	[つまずきやすい] (19)	『歩くときに歩幅が狭くなり、歩きづらかった』
	[歩幅が狭くなる] (24)	『足が重く拳がらさず段差を越えにくかった』
	[足が拳がりにくい] (24)	『畳の上を歩くときにすり足になった』
	[すり足になる] (34)	『歩行の速さが遅くなる』 『敏速な行動がとれない』 『ゆっくりしか行動できないのでトイレ、浴室、浴槽の使用に時間がかかった』
【心理的側面の理解	[動作がゆっくりになる] (32)	『歩くのに時間がかかり疲れた』 『紐を結ぶ、解くのに時間を要し疲れた』 『椅子に座れるようにすると楽だと感じた』
	[動くときと疲労しやすい] (24)	
心理的側面の理解		
カテゴリー	サブカテゴリー	記述データの部分引用
【心理的な負担感の増大】	[不安] (28)	『一人だと、寂しさを感じることもあると思うので、誰か傍にいて、話してくれると安心すると思う』 『見えない、聞こえないことが不安やストレスとなる』
	[いらだち] (12)	『自分が今まで簡単にできていたことが上手くできなくなると、自分への劣等感や苛立ちを感じるだろうなと思った』 『靴がはき辛い自分自身にイライラすると思う』

[恐怖] (20)	『楽しいはずのお風呂もおぼれるのではないかと思うと怖くて楽しめない』 『距離感がつかめないので、高低が激しかったりすると怖いと思った』
[孤独] (21)	『人の手が必要な場面に遭遇することもあり、一人では解決できない場合がある』
[不快] (16)	『風呂に入るのも想像以上に大変で風呂嫌いになりそうだった』
[情けない] (32)	『自分の体が思うように動かないから、何かをやろうと思っても、途中であきらめなくなる』 『うまくできないことに情けなくなり悲しくなる』 『色の見分けができないことで、折り紙の色や景色について介助者の人との話が合わず、落ち込む』
[辛さ] (28)	『だんだん機能が低下してくると、その喪失を受け入れるのがとても辛いことだろうと感じた』
[ストレス] (52)	『日常生活動作すべてが思うようにならないので、ストレスがたまる』

社会的側面の理解		
カテゴリー	サブカテゴリー	記述データの部分引用
【社会的活動の減少】	[会話の減少] (45)	『知らない人とはあまり話したくないと思った』 『話声が聞き取りにくいので話したくないと思った』
	[活動範囲の減少] (42)	『室内から室外や屋外にはあまり出たくなかった』
	[事故の多発] (34)	『前かがみの姿勢で転びやすかった』
		『畳や段差につまづきやすく、転びやすかった』 『浴室や浴槽内では滑りやすかった』
	[住みにくさ] (30)	『手すりなどの福祉用具があると生活しやすい』 『住環境整備をすると生活しやすい』 『畳の部屋では生活したくないと思った』

表4-2. 介助者役体験の学生の学び

介助のあり方		
カテゴリー	サブカテゴリー	記述データの部分引用
【コミュニケーションの工夫】	[大きな声で話す] (56)	『自分の声がこもって、相手の声が聞き取り難いので何度も聞き返してしまう』 『大きさというよりははっきりとゆっくり話すことが良いと思った』
	[ジェスチャーを利用する] (36)	『耳が聞こえにくいいため、会話することがしんどくなる、ジェスチャーを交えるとわかりやすい』
	[視野に入った声かけ] (24)	『後ろから話しかけられると、他のことに集中していたら自分に話し掛けられたとわからないと思う』
	[耳の近くで声かける] (48)	『ぼそぼそとした話し方では会話が成立しにくいいため、耳元で話しかけるとよいと思う』
【安全を守るための配慮】	[危険回避の声かけ] (43)	『座ったり立ったりするときの手すりは前もって確認すること、無理と思うことは助けを呼ぶことが大切だと思った』
	[高齢者のペースに合わせる] (54)	『高齢者と生活する際は、高齢者のペースに合わせて、ゆったり行動することが大切だと感じた』
	[福祉用具の活用] (42)	『歩くときは杖、壁、手すり、人など身体を支えるものがないと不安だと思う』
	[住環境の整備] (32)	『転倒時にはとっさの受身がとれないので、転んでも骨折しないように、クッションフロアにするとよいと思う』
【社会的活動を促す】	[閉じこもりの予防] (36)	『散歩や趣味活動などへの声掛けをする』
	[活動量を増やす] (48)	『日頃の生活に散歩などを取り入れる工夫をする』
	[他者との交流を増やす] (42)	『レクリエーションなど、他者との交流をさせる』
【心理面への配慮】	[安心感を与える関わり] (38)	『高齢者の気持ちを尊重する態度で関わる』 『相手の立場に立って関わる』
	[できることを増やす] (30)	『できているところは言葉で伝え励ます』 『介助して欲しいところを尋ねながら介助する』

高齢者役体験の学生の学びでは、加齢による身体的側面の理解のカテゴリーのうち【視力の低下】は「見えづらい」、【視野の狭窄】は「状況判断に時間がかかる」・「距離感がつかめない」、【色覚の低下】は「色の識別がしづらい」、【聴覚の低下】は「音が聞こえづらい」、【触覚の低下】は「触ったものがわかりづらい」、【関節可動域の低下】は「巧緻性の低下」・「肘や腰が動かしづらい」・「歩きづらい」・「座る・立つがしづらい」、【筋力・平衡感覚の低下】は「歩き方が不安定」・「つまずきやすい」・「歩幅が狭くなる」・「足が拳がりにくい」・「すり足になる」、【筋力・平衡感覚の低下】は「転んだ時に手で支えられない」、【緩慢な動作の増加】は「動作がゆっくりになる」・「疲労しやすい」のサブカテゴリーで構成された。

加齢による心理的理解のカテゴリーのうち【心理的な負担感の増大】は「不安」・「いらだち」・「恐怖」・「孤独」・「不快」・「情けない」・「辛さ」・「ストレス」のサブカテゴリーで構成された。

加齢による社会的側面の理解のカテゴリーのうち【社会的活動の減少】は「会話の減少」・「活動範囲の減少」・「事故の多発」・「住みにくさ」のサブカテゴリーで構成された。

介助者役体験の学生の学びでは、介助のあり方のカテゴリーのうち【コミュニケーションの工夫】は「大きな声で話す」・「ジェスチャーを利用する」・「視野に入った声かけ」・「耳の近くで声かける」、【安全を守るための配慮】は「危険回避の声かけ」・「高齢者のペースに合わせる」・「福祉用具の活用」・「住環境の整備」、【社会的活動を促す】は「閉じこもりの予防」・「活動量を増やす」・「他者との交流を増やす」、【心理面への配慮】は「安心感を与える関わり」・「できることを増やす」のサブカテゴリーで構成された。

VI. 考察

1. 高齢者の身体的、心理的、社会的側面の理解への影響

先行研究では高齢者疑似体験後にマイナスイメージが増加することが報告^{10) 11)}されている。本研究では高齢者疑似体験後の高齢者の身体的、心理的、社会的側面の理解について分析した。その結果から学生は、加齢による身体的な変化としては【視力の低下】、【視野の狭窄】、【色覚の低下】、【聴覚の低下】、【触覚の低下】、【関節可動域の低下】、【筋力・平衡感覚の低下】、【緩慢な動作の増加】など身体的側面をマイナスイメージとして捉えていることが明らかになった。このことは、高齢者疑似体験後にマイナスイメージが増加するという報告^{10) 11)}と一致している。

今回学生は高齢者体験セットを装着し椅子からの立ち上がり室内を歩く、畳の部屋まで移動し座位になる、福祉用具を用いて座位から立ち上がる、室内からエレベーターホールまでの移動に関する行動体験をしたことやグローブ、耳栓、ゴーグルを装着しカタログを見て、注文表にオーダーを書く、カタログや新聞、指示書の字体・大きさを見る、カードホルダーの穴に紐をとおし紐結びと紐解き、折り紙の色をあてる・折り紙を折る、物品に触れる、景色を見るなどの視力や聴覚、触覚、触覚などの感覚機能に関する行動体験をしている。これらは、実際に学生自身の身体に負担をかけ、身体の拘束を強調した活動をとおして、75歳から80歳ぐらいの高齢者の円背や上肢及び下肢の関節可動域の制限、そして特に視力や聴覚といった感覚機能の低下などを疑似体験しているといえる。筋力や平衡感覚、視力や聴覚、触覚などの感覚機能に問題のない青年期の学生が、このような急激な日常生活行動の変化を体験したことで、学生は高齢者疑似体験後に加齢による身体的な変化をマイナスイメージとして捉え理解していると考えられる。これまで高齢者疑似体験では、身体的な変化のほかに、高齢者の気持ちの理解が得られると報告されている⁴⁾。本研究においては、加齢による身体的な変化を体験することによって学生は、加齢による心理的な変化としては【心理的な負担感の増大】を、加齢による社会的な変化としては【社会的活動の減少】など、心理的側面及び社会的側面をマイナスイメージとして捉えていることが明らかになった。学生は高齢者疑似体験をすることにより、実際に身体的な変化を体験したことで、感じることや気づくことができたといえる。つまり学生が高齢者疑似体験をすることによって、高齢者を感覚的な理解から、さらに深い理解を促したものと考えられる。

2. 高齢者疑似体験演習と高齢者理解のための今後の課題

高齢者疑似体験演習においては、学生が高齢者疑似体験をすることで、高齢者の視点に立った介助をすることができると考え、高齢者役と介助者役を体験させている。高齢者疑似体験演習における高齢者の介助のあり方への影響と高齢者理解のための今後の課題について分析した。その結果、高齢者の介助においては、身体的側面のうち【視力の低下】、【視野の狭窄】、【色覚の低下】、【聴覚の低下】、【触覚の低下】などの感覚機能の変化に気づくことによって、高齢者との会話では「大きな声で話す」、[ジェスチャーを利用する]、[視野に入った声かけ]、[耳の近くで声かける]といった非言語的コミュニケーションも併せて行う【コミュニケーションの工夫】が必要と気づいている。また、【触覚の低下】、【関節可動域の低下】、【筋力・平衡感覚の低下】、【筋力・平衡感覚の低下】、【緩慢な動作の増加】などの感覚及び身体的機能の変化に気づくことによって、高齢者の歩行や移動では、[危険回避の声かけ]、[高齢者のペースに合わせる]ことや高齢者の身体機能の状態に応じた[福祉用具の活用]、[住環境の整備]などの【安全を守るための配慮】が必要と気づいている。さらに、加齢による身体機能の低下やコミュニケーションが上手く取れないことにより、【心理的な負担感の増大】を生じ、そのことが【社会的活動の減少】に繋がっていることに気づくことによって、高齢者と関わるうえでは、[安心感を与える関わり]や[できることを増やす]という【心理面への配慮】をすることが必要と気づくことができている。また、[閉じこもりの予防] [活動量を増やす] [他者との交流を増やす]などの【社会的活動を促す】ことが必要と気づくことができている。つまり学生は、高齢者疑似体験演習において高齢者役と介助者役を体験することにより、高齢者の身体的、心理的、社会的側面の変化から具体的な高齢者の介助のあり方に気づくことができることが示唆された。

体験学習にとって最も大切なのは“気づき”であることが報告されている¹²⁾。また、学生が自らの経験から学ぶ力を高めるためには、学生自身が気になったり、困ったりした出来事の意味を考え、その解決のための方法を探求していくことが必要である¹³⁾。学生が高齢者の身体的、心理的、社会的側面の変化に配慮した関りができるようになるために高齢者疑似体験演習での気づきを老年看護学実習に活かすことができるならば、高齢者ケアに有効な学習方法であると考えられる。本研究で得られた気づきは、老年看護学実習以外の臨地実習においても、学生の高齢者ケアへの関わりに良い影響を及ぼすと考えられる。そのためにはまず、高齢者を理解するためにコミュニケーションを上手く取ることが必要である。高齢者疑似体験演習の学習効果の一つとしては、高齢者とのコミュニケーションを深めることに役立つことが考えられる。よって今後は、高齢者とのコミュニケーション手段としての援助技術や非言語的コミュニケーションの実施方法について指導を強化することが必要と考える。また、身体機能の低下などのマイナスイメージは、学生が高齢者に関わる時に悪影響を及ぼすと考えられる。学生の高齢者に関する正しい知識や情報は、高齢者に対する態度と関連するといえる。よって、高齢者を正しく理解する知識や情報を得られるようなアセスメント能力を育成できるよう指導を強化する必要があると考える。

以上、学生は高齢者疑似体験演習をすることによって、高齢者の身体的、心理的、社会的側面の理解をすることができていることが明らかになった。これらの気づきは、高齢者の介助のあり方にも影響していることが示唆された。高齢者疑似体験によって得られた理解を高齢者の介助に繋げていくためには、高齢者とのコミュニケーション手段としての援助技術や非言語的コミュニケーションの実施方法および高齢者を正しく理解する知識や情報を得られるようなアセスメント能力を育成できるよう指導を強化することが重要と考える。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、1学年のみの記述内容の分析であり、結果を一般化することが困難である。今後の継続的な取り組みのなかで対象者を蓄積した検討が必要である。今後は、高齢者疑似体験に加えて、高齢者とのコミュニケーション手段としての援助技術や非言語的コミュニケーションの実施方法および高齢者を正しく理解する知識や情報を得られるようなアセスメント能力を育成できるよう指導を強化することにより、高齢者の理解を促すよ

うな取り組みが必要と考える。

VII. 結論

高齢者疑似体験演習の学習効果について分析した結果、以下の点が明らかになった。

1. 身体的側面の理解は【視力の低下】【視野の狭窄】【色覚の低下】【聴覚の低下】【触覚の低下】【関節可動域の低下】【筋力・平衡感覚の低下】【緩慢な動作の増加】、心理的側面の理解は【心理的な負担感の増大】、社会的側面の理解は【社会的活動の減少】が抽出された。
2. 高齢者疑似体験は、高齢者の身体的、心理的、社会的側面の理解に影響を与えている。
3. 高齢者理解のためには、高齢者とのコミュニケーション手段としての援助技術や非言語的コミュニケーションの実施方法および高齢者を正しく理解する知識や情報を得られるようなアセスメント能力を育成する必要がある。

【引用文献】

- 1) 国民衛生の動向67巻9号, 財団法人厚生統計協会, 東京, 8, 2020.
- 2) 緒方昭子・竹山ゆみ子・土屋八千代: 高齢者体験セットを用いての片麻痺高齢者の車いす移乗・移送の演習評価 看護役・高齢者役・観察者の3側面の学生の記録より, 南九州看護研究誌, 9 (1) p39-46, 2011.
- 3) 福田博美・秋山志津子・石井美紀代: 高齢者体験セットを身に付ける前後の「高齢者に関する記述」の変化, 愛知教育大学研究報告, 教育科学, 52, p75-79, 2003.
- 4) 栗原トヨ子・木之瀬隆・井上薫, 他: 保健医療系学生のため的高齢者疑似体験プログラムの意義, 体験による高齢者に対する意識の変化の考察, 日本保健科学学会誌, 7 (3), p194-199, 2004.
- 5) 流石ゆり子・亀山直子: 「健康高齢者実習」の意義, 学生の実習終了レポートの分析による学習内容の検討 (実践報告), 老年看護学, 9 (1), p65-75, 2004.
- 6) 橋本文子・松下恭子・多田敏子: 看護学生を対象とした高齢者疑似体験学習の意義-高齢者および介護者体験からの学び-, 老年看護学, 7 (1), p95-102, 2002.
- 7) 相羽利昭・山村江美子・板倉勲子: 高齢者疑似体験演習による高齢者のイメージと高齢者理解の変化-看護学生の高齢者イメージの自由記載の内容分析から-, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 11, p119-126, 2003.
- 8) 柿川房子・石川陸弓・佐藤敏子, 他: 老年看護学授業展開-高齢者疑似体験演習学習に関する検討-, 三重看護学誌, 3 (1), p175-182, 2000.
- 9) 中村令子・中山裕子・清水仁美: 老年者疑似体験演習の学習効果についての検討-臨地実習での老年者とのかかわりからの評価-, 岩手女子看護短期大学紀要, 6, p9-16, 1998.
- 10) 名倉順子・天下井深雪: 老年観育成の試み-高齢者に対するイメージの変化-神奈川県立平塚看護専門学校紀要, 11, p17-16, 1998.
- 11) 服部紀子・中村真理子: 老人イメージの変化-高齢者疑似体験前後の比較から-, 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報, 11, p17-16, 2000.
- 12) 大塚久美子: 第4章シミュレーション, 藤岡完治・野村明美 (編): わかる授業を作る看護技術教育技法3シミュレーション・体験学習, p133-144, 医学書院, 東京, 2000.
- 13) 安酸史子: 学生自身の体験を基にした臨地実習教育, インターナショナルナーシングレビュー, 23 (5), p17-16, 2000.

The learning effect of the senior citizen vicarious experience practice

Yukiko Ueda

The purpose of this study was to clarify the learning effects of a simulated experience exercise for the elderly. The results of the analysis revealed the following. As for the understanding of physical aspects, the following were extracted. [Decreased visual acuity], [Narrowed visual field], [Decreased color vision], [Decreased hearing], [Decreased sense of touch], [Decreased range of motion of joints], [Decreased muscle strength and sense of balance], [Increased slow movements]; for the understanding of psychological aspects, [Increased sense of psychological burden]; and for the understanding of social aspects, [Decreased social activities] were extracted. The simulated experience of the elderly affects our understanding of the physical, psychological, and social aspects of the elderly. In order to understand the elderly, it is necessary to acquire assistive techniques as a means of communication with the elderly, how to implement non-verbal communication, and assessment skills that can provide the knowledge and information needed to properly understand the elderly.

Key Words: Elderly person understanding, elderly person simulated experience practice, learning effect, nursing university student